廣野先生を送る言葉

長　尾　　建

この度，現代文化学部では本間邦雄教授とともに，廣野行雄教授という尊敬すべき先輩を，退職により送らねばならなくなった。致し方ないこととは言え，本学部としては大きな損失であることは間違いない。わたしが着任してもう十数年になるが,右も左も分からないまま着任した当初,廣野先生は「この先生をお手本として教員生活を送ろう」と思った先生のひとりである。先生は現代文化学部において，まさに「重し」のような存在でいらした。

先生の学問分野は非常に広く，ご専門の中国文学はもちろん，日本文学，とくに近世の芸能についても深い見識を示しておられた。日本文学を研究しているわたしなどは，先生の広い教養と文学に対する深い理解に何度舌を巻いたことであろう。是非先生のご著書やご論考を見ていただきたい。分かりやすく，かつ論理的である文章は，文学研究を専門とする，否それを志そうとする者にも大いに触発される文体，内容となっている。ご論考だけではない。学生を相手とした講義でも，その姿勢はお変わりなかった。わたしは「留学生用プレゼミナール」という授業でご一緒させていただいたが，日本文化を勉強しにきた留学生たちに，近世芸能の歴史などを論理的で分かりやすく，かつユーモアに溢れた口調で教授する姿に感動すら覚えたほどだった。「留学生用プレゼミナール」では，先生の教授法をわたし自身再現できるように努めようを思った次第である。

先生は研究，教育部門以外でも，現代文化学部に多大なご尽力を傾けられた。その最たるものが，入試委員長としてのご功績である。現代文化学部は心理学科の学部への独立や，繰り返されるカリキュラム変更，否応なしに求められる定員数の増加といった事態に，何とか柔軟な対応を取ることができている。それというのも，廣野入試委員長が毎年定員数を超える学生を確保して下さったおかげである。これは並大抵なことではない。先生がどれほどご苦労なさったかは想像に難くない。まさに廣野入試委員長が，現代文化学部を支え続けられたと言っても過言ではないのだ。定員数を確保するのが難しくなりつつある昨今である。今の現代文化学部が順調に定員数を確保できているのも，先生が作ってくれた土台があってこそなのだ。先に先生を「重し」と形容したのも，まさにこの意味である。

「重し」と言えば，先生は入試業務以外でもまた「重し」であった。教授会などの会議では普段寡黙でいらした先生が，難しい議題に他の教員たちが判断を迷っている際に，しばしば決定的なお言葉を述べられた。そのお言葉にわたしたちは安心と確信を持つことができた。それは他の教員が先生に一目置いていたからではない。まさに核心を突いたご意見を，説得的かつ論理的に述べられたからだ。その意味で，やはり先生は現代文化学部の「重し」だったのである。

確かに先生がご退職なさることは，残されたわたしたち現代文化学部の教員には，大きな損失である。わたしたちは先生の精神を受け継いで，現代文化学部のさらなる発展に努めなければならない。さらに先生には今後の研究活動を通じて，今まで以上にわたしたちを刺戟していただきたいと思う。

先生には教養文化研究所，および「駿河台大学論叢」の編集で大変お世話になった。先生がこの文章を,わたしのような者にご依頼なさったのは,その関係からであると存じている。わたしのような者が，この大役を務めたことに不快を感じる方もいらっしゃることと思うが，廣野行雄先生への尊敬の念が人一倍強いことに免じて，ご寛恕いただけたらと思う。